

『今昔物語集』の「東国」語り

竹村信治

1 「東国」語りの地平

その著『今昔物語集の新研究』（一九三三年刊）に「説話の地方的分布」の一節をもうけて「説話の地方的分布地図」を掲載した坂井衡平は、『今昔物語集』「東国」話題の「分布上の形勢」について次のように述べている。

武蔵、上野等親王任国の説話著しく衰へて、常陸独氣を吐き、東山道にては近江、美濃、信濃の諸国、官人の往復の盛なりしに伴れてにや、その説話の採録せられたる最も多し。坂東の名の廿回引用せられたるも注目すべき事なり。陸奥の四十回引用せられたりしは、其地域の廣大にして、国司の重任なりしと、京師を隔つる事最も遠

くして所謂陸のく話なるもの、市人の間に異郷の珍談として喜ばれしとに因るものならん。

〔坂東〕用例は三話、〔陸奥〕は三〇話

坂井は、諸州地名の出現回数は「京都に対する文化的交通の關係」に比例し「其結果は宛から第四、第五文化時代の世相の一斑を説明するものに似たり」として右のように概観しているのだが（上掲書第一編第二章第一節によれば、第四文化時代とは平安後期「近世的文化萌芽時代（尙下の）」の第一期（一〇二八～一〇六八）で「貴族中心の前期文化が漸く近世的國民的文化に移らんとする時代、即ち頼通時代」、第五文化時代はその第二期（一一〇六九～一一二八）の「近世的要素が中世的要素と衝突して漸く表面の重大要素たらんとする所謂院政時代」のこと。ちなみに、第六文

化時代Ⅱ後期第三期（二二九〜二一八五）は「新旧要素が主客所を換へしも、時代錯誤の爲に旧時代の文化を再現せんとせし所謂平家時代」とされる、これは本集を読む者のおおむね首肯しうる見解であろう。

もつとも、説かれる「文化的交通の關係」は、これを「京都」〔中心・〈内〉〕に対する「東国」〔周辺・〈外〉〕といった一元的な關係のなかでのみとらえるとすれば——「異郷の珍談」Ⅱ〈内〉による〈外〉の特殊化、「下向都人による地方」説話の採録Ⅱ〈内〉による〈外〉の所有、等々——、情況の誤認をまねくことになる。たとえば、卷二八二「頼光郎等共、紫野見物語」には、「東ニテモ度々吉キ事共（Ⅱ武功）ヲシテ人ニ被恐タル兵共」たる平貞道・平季武・坂田公時が慣れない牛車（女房車）に酔つてあげた「横ナバリタル」声について、それを聞いた近くの者たちが、

此ノ女房車ノ、何ナル人ノ乗タルニカ有ラム、東雁ノ鳴合タル様ニテ吉ク舌ダミタルハ、心モ不得又事カナ。東人ノ娘共ノ物見ルニヤ有ラムト思ヘドモ、音・氣ハヒ大キニテ男音也。惣テ心不得ズ

と思つたとある。「東人ノ娘共ノ物見ルニヤ有ラム」との判断がなされるのは、そうしたことが実際にあつたからである

う。また、「横ナバリタル」声、すなわち訛り声を「東雁ノ鳴合タル様ニテ」と聞くのは東国方言を耳にすることがあつてのことであろう。周知のとおり、律令体制下の都には歳役労働で單身赴任している地方民も住んでいた（短期の衛士、長期の帳内・資人）。つまり、こうして「東国」は、そこに出かけた都人によつて「採録」紹介される「異郷」というばかりではなく、「京都」内部に流入し、都人が日々接触到認知しうるものとしてあつたのである。

上京する「東人」には「物見」歳役等のほか「榮尊尋テ買ハムト思テ京ニ上タル者」もいた（卷二七17）。そうした京上の「東人」のなかにはそのまま居着く者もいたのである。卷一七28の「京ノ大刀帯町ノ辺ニ住ケル女」は「東国ノ人」で「事ノ縁有二依、京ニ上テ住」んでいたという。あるいは、卷三二3「湛慶阿闍梨選俗、為高向公輔語」の、湛慶に頸を掻き斬られながらも長じて藤原良房邸で彼と結ばれた女は、「玉葉」仁安三年三月一四日条の藤原長光の物語りによれば生国「尾張国」、のち「忠仁公」の邸に参じ「半物」として「宮仕」していたらしい。無媒介な〈外〉Ⅱ「東国」の〈内〉への参入。「文化的交通の關係」はかかる事態をもまねきよせる。したがつて問題は、都の〈内〉で生活し、声を

し、行動し、都人と接触する、そうした彼らの姿を目の当たりにしたとき、「異郷」として特殊化され飼ひ慣らされた〈外〉Ⅱ「東国」像を受容していた〈内〉なる者たちが、これとどう向き合い、いかなる「東国」を語り出すことになるかにあるはずだ。「東雁ノ」といい、「東人ノ」「東国ノ」といい、ここに見た事例は「都」の〈内〉で差異化と特殊化をなおこうむっているケースだが、やがてこの他者との無媒介な交渉が〈内〉なる言説（Ⅱ〈外〉を〈外〉として差異化し特殊化し飼ひ慣らす言説）の相対化を都人にうながす場合もないわけではあるまい。そしてそこで生成する眼差しが〈外〉をめぐるあらたな語りをうみだすこともありえよう（〈内〉〈外〉の変数項にいくつかの語——地名・地域名・民族名・宗派名・国名等——を代入してみればわかるように、現代でもかかる事態はさまざまなレベルでみうけられることだ）。

さて、こうして『今昔物語集』の「東国」説話は、院政期における〈内〉〈外〉の「文化的交通」の状況下に、〈内〉において語られている（このテキストの成立をめぐることは南都説の声も高いが、旧都にして仏教聖地、しかも交通流通の要所たる彼地においてもこの言述の言語的機制は大きくかわるまい）。無媒介な〈外〉の〈内〉への流入、参入。もちろん、〈内〉による

〈外〉の所有は、諸文学テキストに見られるとおり、ひきつづき行われている。「文化的交通」のもとではなおいくつかの事態も生じているようだが、以下、『今昔物語集』「東国」説話のいくつかを取り上げてそのあり様を観察しつつ、本集「東国」語りの位相をうかがうこととしたい。

2 「東」「東国」の原像

『今昔物語集』には「東」「東国」の語例が二五話に見いだされる。ほかに「東八ヶ国」（相模・武蔵・安房・上総・下総・常陸・上野・下野）の語が合戦譚を収載する巻二五に二話（1・5）、「坂東」が三話（巻二33・巻三1・9）にみえる（依拠資料の語彙を踏襲したもの）が、これらは「東」「東国」に包摂されるものだろう。巻二四52には、和琴を試みて嘔おうとした女房たちに、大江匡衡が「逢坂の関のあなたもまだ見ねばあづまのことも知られざりけり」と応じたとの話題が語られている。この掛詞を理解し得たであろう『今昔物語集』の「東」「東国」は、したがって、逢坂関以東の東山道（近江・美濃・飛騨・信濃・上野・下野・出羽・陸奥）東海道（伊賀・伊勢・志摩・尾張・三河・遠江・駿河・伊豆・甲斐・相模・武蔵・安房・上総・下総・常陸）の諸国の総称であったと考えてまちがいはない。

ないだろう(ただし、巻二五二には出典『将門記』の記述を踏襲した「東海・東山ノ国々」との言い方もみえる)。

『今昔物語集』の「東」「東国」の語例を通覧して興味深いのは、それが国名表記を伴っていない場合の多いことだ。伴う場合も、

・本寺(法隆寺)ヲ棄テ、生国(下野)ニ至テ、東国ノ諸ノ山ヲ通リ行フ間、

(巻二三四)

・(在原業平)東ノ方ニ可住キ所ヤ有トテ行ケリ。…而間參河ノ国ニ八橋ト云所ニ至ヌ。…其ヲ立テ眇々ト行々

テ駿河国ニ至ヌ。…其ヨリ行々キ、富士ノ山ヲ見レバ…尚行々テ武藏国ト下総国トノ中ニ…(巻二四三)

・東国ニ平将門ト云兵有ケリ。…将門、常陸・下総ノ国ニ住シテ…坂東…東八ヶ国…(巻二五一)

・(頼信)貞道ヲ呼ビ向ケテ云様、「駿河国ニ有ル□□ト云フ者ノ、頼信ガ為ニシヤ頸取テ得サセヨ」ト。…其後三四月許過テ、要事有テ、貞道東国ノ方ニ行ニケリ。

(巻二五二)

・男「美濃・尾張ノ方ヘ罷下ル也」ト答フ。…女「自ハ近江ノ国□□ノ郡ニ其々ニ有ル然々ト云フ人ノ娘也。東ノ方ヘ御セバ、其ノ道近キ所也…」(巻二七二)

・其レガ、相撲ノ使ニテ東国ニ下タリケルニ、陸奥国ヨリ常陸ノ国ヘ超ル山ヲバ…(巻二七五)

と、広領域をしめす例がほとんどなのである。くわえて、地名・人名の後補を期して空格欠字をなす『今昔物語集』にあつてその処理をほどきさない例もみえる。

・今昔、京ヨリ東ノ方ニ下ル者有ケリ。何レノ国、郡トハ不知デ、一ノ郷ヲ通ケル程ニ、(巻二六二)

・今昔、東ノ方ヘ行者有ケリ。何レノ国トハ不知、人郷ヲ通ケルニ、(巻二六九)

これらによれば、『今昔物語集』の「東」「東国」は大江匡衡歌にあつたごとく、逢坂関のあなたを漠然と指さすための語であつて、空間イメージも国々の個性を捨象しつつトータルに形成されていたものとおぼしい。そしてそのイメージは「あづまのことも知られざりけり」、つまりは不可知性、不可思議性を根幹にもつ。巻二四三「藤原実方朝臣、於陸奥国読和歌語」には実方が陸奥国から都の宣方中将に贈つた歌「やすらはで思ひ立ちにし東路にありけるものはばかりの関」も採録されているが、「東路にありけるもの」は出かけていつて始めて認知されるものに満ちている、というわけなのである。

いうまでもないことだが、こうした「東国」イメージは、たとえば『古今集』序にも触れられる『万葉集』安積山歌三三八〇七番「安積山影さへ見ゆる山の井の浅くは人を思ふものかは」をめぐる伝説（『大和物語』兩段）のそれと同じ位相にあるものである。内舎人に奪われて陸奥国は安積郡安積山の庵で暮らした大納言女は、山井にうつる自らの衰えた容貌に絶望して右の歌を詠む。その後、『大和』に「〔安積山〕歌」とよみて木に書き付けて庵に来て死にけり」とある叙述は、『今昔物語集』卷三〇八の同話では、

〔安積山〕歌）ト云テ、此レヲ木ニ書付テ、庵ニ返リ行テ、我が家ニ有シ時、父母ヨリ始メテ万ノ人ニ被傳テ、微妙カリシ事共ヲ思ヒ出シテ、心細キ事無限ク、「何ナル前ノ世ノ報ニテ此ルラム」ト思ケルニ、否ヤ不堪ザリケム、ヤガテ思ヒ死ニ死ニケリ。

と増幅される。不可知の地「東国」を流浪する都人の心情が、追慕回想のうちの都・「東国」の差異化、絶望感の強調をもって語られているのだが、こうした語り方は『伊勢物語』東下りの諸章段にも認められ、やがて和歌などいわゆる文学テキストにおける「東国」羈旅表現の本意となっていくものでもある。これはもちろん〈内〉が一方的に付与した

〈外〉Ⅱ「東国」の像。『今昔物語集』はその影響下にあつてこれを原像としてかかえもち、「東国」語りのうちにかかる言説を再生産しているのである。

3 不可知と怪異の「東国」

「都」との差異を強調しつつ不可知性が際だたせられる「東国」は、その不可知性の故に、多くの靈異奇異怪異譚の舞台ともなっている。『今昔物語集』は卷二六・二七にそうした話題を収集しているが、この両巻には「東」「東国」の語彙をもつ話題が九話（二六・七・一八・一九・二〇、二七・一四・一七・二〇・四五）ある。さらには、近江（二七・一三・二〇）・美濃（二六・三・二七・二一・四三）・飛驒（二六・八）・陸奥（二六・五・一四）・伊勢（鈴鹿山二七・四四）・三河（二六・一）・伊豆（二七・一）・常陸（焼山関二七・四五）と、「東国」諸州の話題も多い。卷二六・二〇「東小女、与狗咋合互死語」は題名中「東小女」とあるが、物語叙述中には「東」「東国」の語や国名が一切出ず、冒頭を「今昔、□□□□ノ郡ニ住ケル人有ケリ」ではじめる話題。こうした地名に欠字をもつ話はこの両巻に多いが（卷二六・二〇・二一・二二・二四・三三・三五）、そのいくつかがこの第20話同様「東国」話題であるとすれば、その数はいっそう増えること

にならう。

『今昔物語集』の「東国」怪異譚は数おおくあるが、彼地の不可知性を色濃くにじませているのは卷二六八「飛驒国猿神、止生贄語」だろうか。道に迷った修行僧が進退きわまり、突如としてあらわれた男につづいて滝の中に踊り入ったところ、そこは「日本ノ国」と堺を接する異界だったという。僧はそこで欲待され食い肥えるわけだが（このあたり巻五一の羅刹女国に漂着した僧伽羅譚と同モチーフ）、欲待が猿神への生け贄とするためだと知って策を練り、ついには猿神を退治し、「其後、其郷ノ長者トシテ人々ヲ進退シ仕ヒテ」、「此方（日本）ニモ時々密ニ通」った。その地は「飛驒国ノ傍」、しかし「此ル所有トハ聞ケドモ、信濃国ノ人モ美濃ノ国ノ人モ行事無カ也。其（日本）人ハ此方（日本）ニ密ニ通ナレドモ、此方ノ人ハ行事無カナリ」云々。猿神退治譚はこの前話（卷二六七）にもあつて、ここでは美作国の「中参」神が狛師に退治される。この狛師は「東ノ方ヨリ、事ノ縁有テ其国ニ来レル人」だったといい、不可思議な力を内包する異境に不可知の地に「東国」といった彼地をめぐるイメーシの参与が思われるが、それはともかく、第8話がこれとことなり異境訪問譚の要素を組み込んでいるところには、出来事

出来の舞台たる東国に「飛驒国」にかかわって作動した想像力の関与を考えてよいのであろう。異境訪問譚は卷三一「陸奥国安倍頼時、行胡国空返語」にも見える。ここでの胡国はいまの北海道のことだが、「然レバ、胡国ト云フ所ハ、唐ヨリモ遙ノ北ト聞ツルニ、『陸奥ノ国ノ奥ニ有、夷ノ地ニ差合タルニヤ有ラム』ト、彼ノ頼時ガ子ノ宗任法師トテ筑紫ニ有ル者ノ語ケルヲ聞継テ、此ク語り伝ヘタルトヤ」と結ばれる本話にも、異界と境を接する不可知の地との「東国」に「陸奥国」像は投影しているようだ。

異界に通ずる飛驒国の隣国、信濃国での不思議な話には卷二〇「陽成院御代滝口、金使行語」があつた。「金ノ使」として「陸奥ノ国」に派遣された滝口「道範」とその一行は、宿をとった「信濃国□□郡」の郡司の家でその妻のもとに忍び入り、郡司の術で陰莖を奪われる。道範は帰途に再び立ち寄り秘術を会得しようとするが叶わず、「何かを」墓無キ物ニ成シナド為ル」術だけを伝えられて帰京し、これを聞きつけた陽成帝が習いやがて乱行に及んだという。陰莖にかかわる怪異は卷二七「美濃国紀遠助、値女靈逐死語」にも見え、ここでは、京の「東三条院ノ長宿直」をおえて「美濃ノ国ニ有ル生津ノ御庄」に帰ろうとした遠助が、「勢田ノ橋」

で、或る女房から「人ノ目」「男ノ聞」の入った箱を託され、美濃「方県ノ郡ノ唐ノ郷ノ段ノ橋」の「橋ノ西ノ爪」にいる女房へとそれを運ぶ。「勢田ノ橋」の鬼は卷二七14にも出現し、同じ近江の「安義橋」鬼の話題も同卷13にある。

近江国といえ、印象にのこる話題に卷二七20「近江国生靈 来京殺人語」がある。「近江ノ国□□ノ郡ニ其々ニ有ル然々ト云フ人ノ娘」は「美濃・尾張ノ程ニ下ラムト為ル下臈」に京都市中の「民部ノ大夫」邸への道案内を乞い、着くや俄にかき消えてかつての夫を取り殺す。三日後に近江の家を訪れた下臈に、かの生靈の生身は「有シ夜ノ喜ヒハ何レノ世ニカ忘レ聞エム」と述べ、手厚く礼を尽くしたという。

かくして「東国」Ⅱ〈外〉の靈異奇異怪異は、「異郷の珍談」として採録されたり、道範その他の場合のように、「東国」でこれを経験した都人たちによって〈内〉に持ち帰られたが、そればかりでなく、〈内〉なる都で直接に経験されることにもなった。けれども、卷二七20の場合、これは見方を変えれば〈内〉の怪異が〈外〉によって説明されたかたちでもある。かつて〈内〉によって特殊化され差異化された〈外〉をめぐる表象が逆に〈内〉なる事象を照射し意味づけていくといった構図。「文化的交通」はこうした〈内〉と

〈外〉との反転をももたらしたようだ。もちろんそこには〈内〉の動揺が前提としてであろう。『今昔物語集』に語られる京都市中怪異譚が〈外〉の怪異譚とアナロジカルな相対的關係にあり、そうした話題を本集が多く収載しているのも、おそらくはこの動揺と「反転」にかかわっている。

4 「今昔物語集」の「東国」語り

不可知不思議の地たる「東国」原像は仏法譚でも卷一六6「陸奥国鷹取男、依観音助存命語」、卷一七5「依夢告徒泥中堀出地藏語」、同8「沙弥藏念世称地藏变化語」、卷二〇21「武蔵国大伴赤麿、依悪業受牛身語」などに影を落としているが、その多くは靈驗出来の修行地像へと変換されるかたちで語られているようだ。卷一一32「田村將軍、始建清水寺」では示現をえて東山に入った賢心の前に現れた翁・行叡が、「我レ東国ノ修行ノ志シ有リ」とのべて「搔消ツ様ニ」姿を隠す。ほかにも西京から常陸へと出かけて地藏菩薩との値遇を願った僧（卷一七一）、2節で引いた「東国ノ諸ノ山ヲ通り行フ」僧（卷一三4）も語られている。後者は一度法隆寺に住した後に生国下野に帰って修行した僧だが、逆に、「旧里ヲ棄テ、金峰山ニ詣テ」、「其レニ籠居テ日夜ニ法華経ヲ読テ

十余年ヲ経、ついに「煩惱不淨ノ体ヲ棄テ、清淨微妙ノ身」を得た僧も登場する。卷二二40の良算持経者がその人で、「本八東国ノ人」。彼は出家後、彼地において「永ク穀ヲ断チ塩ヲ断チ、山ノ菜・木ノ葉ヲ以テ食トシテ、法華経ヲ受ケ持テ後、日夜ニ読誦シテ他ノ勤メ無シ。深キ山ニ住シテ里ニ出ル事無シ」との修行の日々を過ごし、やがて一念発起して金峰山に上つたのだった。

靈驗出来の修行地としての「東国」像。こうした像の形成には、たとえば卷一七29にその名が見える「興福寺ノ前ノ入唐ノ僧徳一菩薩」、あるいは先の法隆寺僧や卷一三40の興福寺僧光勝・法蓮（生国陸奥）たちのような「東国」で宗教活動を展開した僧たちの実体が反映しているであろう。ただし、本稿の関心からいえば、たとえば右に引いた良算の「東国」における修行ぶりといった報告の語りがそこに参与していないかどうか、考えてみたいところである。本話は『法華驗記』を典故とするが、この部分に大きな異なりはない。こうした記事がいかにして成つたものか、驗記・靈驗記・往生伝は定型的な語り口をもつので慎重な判断が求められるけれども、一部にでも良算の自己語りが含まれているとすれば、それは「東人」が自ら語つた「東国」の地の修行実態とし

て、貴重な証言となつたであろう。『今昔物語集』にはこのほか、山階寺の涅槃会儀式を整備した尾張国出身の僧寿広（卷二一6）、上総国武射郡出身の金峰山行者広達（同11）などの名がみえる。本集仏法部にみるごとき数多くの「東国」宗教説話は、先の実体的な事情にくわえて、そのような人々の自己語りもしくはこれに基づく伝記テキストが不可知怪異の地にとどまらぬ靈驗出来の修行地「東国」像を形成するなかで、語り出されたものであつたといえないか。それは、無媒介なかたちで〈内〉に参入した〈外〉の自己語りがあるに創り出していった自己像とも呼ぶべきものだが、このような見方にたてば、不可知怪異の「東国」像と靈驗出来の修行地像をとともに描き出す『今昔物語集』の「東国」語りは、そうした〈外〉の自己像と〈内〉の原像との拮抗を映し出すものということにもなる。

さて、ここまで『今昔物語集』の「東国」語りのいくつかの相を取り出してきたが、最後に集中もつとも興味深い「東国」語りの一つ、卷二八37を取り上げて結びとしよう。

本話は、花山院の御門を馬に乗りながら通過してとがめられ、院の命で御前に引き出された「東ノ人」が、その、「鬚黒ク鬢クキ吉」「色白クテ形チ月々シ」「顔、現ニ吉キ者ト見

へテ魂有ラムト思ユ」風貌と装束・武具・馬のみごとさで花山院を魅了した話題。魅入られた花山院は、「鎧抑へタル者ヲモ去ケ、口ヲモ免セ」と命じてその乗馬ぶりに興じ、揚げ句のはてに下部の取り上げた弓をも返し持たせてしまう。結果は「御門ヲ馳出テ、洞院下ニ飛ブガ如クニシテ逃テ去ヌ」。逃げられた院は「此奴ハ極カリケル盗人（岩波新大系脚注「知謀にたけた者」カナ）」とのべて「強ニモ腹立セ不給ズ」と許したようだが、ここには、風流に心を染めた花山院像（「大鏡」など）をかりつつ、見られる存在として見る者を引き寄せ圧倒し、沈黙のまま騎乗疾駆して姿をくらました「東ノ人」の颯爽たる姿が、印象ぶかく語られているように思う。それはまさしく無媒介に〈内〉（都）に参入した〈外〉（東国）と称すべきもの。あるいは、一話中にこれを「兵」とする記述はないが、その装いや騎馬の巧に「兵」の相貌をうかがい、他方、『今昔物語集』の「東国」語りの今ひとつの相をなす兵譚や軍語りで〈公〉観念をもって束ねられ排除され秩序化される「東」の「兵」たち（森正人「今昔物語集の生成」一九八六刊）との対照性にも注意をむけるならば、ここにはまた、無媒介に参入した〈外〉が〈内〉なる〈公〉に抗するすがたも見て取れよう。

問題は、かかる参入した〈外〉に〈内〉がどう向き合っているかだが、「東ノ人」を「極カリケル盗人カナ」と評し「腹立」に及ばなかった花山院には、〈外〉||「東国」「東ノ人」像の更新もすすんでいたかもしれない。それは本話題を収載する『今昔物語集』にもかならずや起こっていた出来事だろう。しかし、『今昔物語集』は本話を巻二八に収め、笑話・烏呼譚として意味づける。笑われているのは花山院とその周辺の人物だが、そこに本集形成の発語過程における話題人物のすり替えを見とおすならば、このいわばはぐらかしには、無媒介に参入した〈外〉との向き合い、対話を回避しようとする『今昔物語集』言語主体の姿がすけて見えるようでもある。『今昔物語集』の「東国」語り、それは流入、参入した〈外〉に気圧されとまどい、〈内〉に逃げ込むこともかなわぬままにそこから身をかかわそうとする、そうした振る舞いをもって語られもしたようだ。

〔たけむら・しんじ 広島大学大学院助教授〕